

戦後80年。
トラウマが、
静かにほどけ始める。



島田陽磨『ちよっと北朝鮮まで行ってくるけん。』『生きて、生きて、生きる。』

× 日本電波ニュース社『荒野に希望の灯をともす』

父と家族とわたしのこと

撮影・監督・制作 島田陽磨

編集・撮影 鈴木馨 | 撮影 井上 耀介 熊谷裕達 | オンラインエディター 中田勇一郎 | 助監督 吉井愛海 | 音楽 渡邊崇 | 音楽助手 中原実優 | 効果・整音 高木創 | 協力 PTSDの日本兵家族会
助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(映画創造活動支援事業)独立行政法人日本芸術文化振興会 | 製作・配給 日本電波ニュース社 | 2026年/日本/カラー/127分/ドキュメンタリー

語られなかった戦争の傷

生きづらさの、こたえを求めて

INTRODUCTION

大阪市で喫茶店を営む藤岡美千代。幼い頃、父から激しい虐待を受けて育った。9歳の時にその父が自死したと聞き、思わず万歳してしまうほどだった。だが成長後、彼女自身もまた、娘を虐待してしまうという苦悩を抱えることになる。

神奈川県でタクシー運転手をする市原和彦。幼少期、父が母に浴びせた「この淫売女が」という罵声は、今も消えない傷として胸に刻まれている。40代で結婚するが、妻に暴力を振るっていたことを死別した今も悔い続けている。

シングルマザーの佐藤ゆな(仮名)もまた、幼少期の虐待により複雑性PTSD(心的外傷後ストレス障害)を抱え、娘との向き合い方に迷い続けている。新興宗教に傾倒した母からの過剰な支配は、今も彼女の心を締めつけている。

三人が抱える「生きづらさ」は、どこから来たのか。

取材を進めるなかで浮かび上がったのは、彼らの父や祖父が、いずれも戦争に従軍していたという共通点だった一。

子どもたちは、親をたどる

近年、帰還兵の多くが深刻なPTSDを抱えていた事実が、ようやく明らかになりつつある。癒やされなかった心の傷は、DVや依存症という形で子や孫へと受け継がれることがあり、肉親間の断絶を引き起こすこともある。その連鎖を、いかにして断ち切ることができるのか。

本作でこのテーマに挑んだのは、『ちょっと北朝鮮までいってくるけん』『生きて、生きて、生きる。』を手がけてきた高田陽磨(日本電波ニュース社)。戦争や国家分断という巨大な力に翻弄されながらも、自らの足で立とうとする〈個人〉を記録してきた監督と、戦後日本の現実を記録し続けてきた日本電波ニュース社が、戦後80年の節目に、受け継がれた痛みと向き合う人々の姿を静かに見つめる。

*プライバシー保護のため、一部の顔および音声にAI加工を施しています。

公式サイトはこちら



2026年3月14日(土) 東京・ポレポレ東中野

3月28日(土) 大阪・第七藝術劇場にてロードショー ほか全国順次公開